

# 日本における中世の射芸

——『吾妻鏡』にみる「作物」つくりものの由来考——

太 田 尚 充

## 凡例

- 一、文中の『吾妻鏡』漢字仮名交り文の箇所は、永原慶二監修、貴志正造訳註『全訳吾妻鏡』（新人物往来社、昭五  
一）よりの引用である。
- 二、括弧内の振仮名、人名等及び文中の傍点は筆者による。
- 三、日本古典文学全集の『今昔物語集』における振仮名は殆んど省略し、読み難いと思われる箇所だけに採用した。

## 目次

- 一、はじめに
- 二、『吾妻鏡』における「作物」
- 三、「作物」という射芸名称について
- 四、射芸「作物」の由来
- 五、おわりに

## 一、はじめに

平安時代末期から武家社会に起りつゝあつた氣風は、やがて武士自身の口から「兵の道」<sup>(つやも)</sup>とか「武者の習」<sup>(むしやう)</sup>といわれるようになった。<sup>(1)</sup>この「兵の道」「武者の習」とはいかなる氣風なのか。これを端的に「武勇、武芸を重んずること」とはもとより、名を尊ぶこと、恥を知ること、不言実行、思慮(思量)のあること<sup>(2)</sup>などゝ表現できるであらう。こゝに至るには、それなりの歴史的経緯があつたと考えられるが、本稿では、このような「兵の道」「武者の習」に対するの思想的考察を試みるのではなく、中世の武士たちにとって、「兵の道」として基本的に求められ、また、自らも求めたに違いない「武勇、武芸を重んずること」の、武芸の中の射芸について、二、三の考察を試みることである。

中世の射芸の中でも、その代表は「弓馬の芸」であつた。「弓馬の芸」に秀でることこそ中世武士の面目であつた<sup>(3)</sup>し、そのことが「兵の道」に通ずると考えられていた。<sup>(4)</sup>そこで、本稿の視点も、この「弓馬の芸」に向けてすゝめることとする。

「弓馬の芸」とは、弓射の術(歩射)<sup>(かちやみ)</sup>と馬を御するの術(馬術)と、この両者の充分な熟練のもとに総合的武芸に高められた騎射術のことである。そしてこの術は、各地の、各武士団の規模の大小にかゝわらず、その武士団の騎馬武者にとって欠かせぬ表芸<sup>(おもて)</sup>であつた。

また、騎射術は、確かに個人技ではあつたが、その習熟の度合は、個人技にとゞまらぬ性格をもつ武芸でもあつた。なぜなら、「馬射」<sup>(うまかみ)</sup>の技術の優劣は、その頃の戦斗形式からいって、自己の生死にかゝわるだけでなく、直接戦斗の帰趨を決定<sup>(5)</sup>するといふ重大な要素をもっていたからである。

かくて「精兵」<sup>(せいへいよう)</sup>とか「一人当千の兵」<sup>(いちどん ちせん)</sup>といわれる武士は、何れも騎射術に抜群の力量をもつた戦斗員であり、そ

の武士団の戦力をなうものであった。

「騎射術」とは、全力疾走する馬上からの射当てる術である。この術の練達が「兵の道」にも結びつくという、いわば、名譽ある武士としての必須の条件であったのである。

この騎射術の習熟練達のために、日常から競って鍛練を重ねていたであろうことは容易に推察できる。おそらく、中世武士たちにとって、この鍛練は、重要な日課の一つであったに違いない。<sup>(6)</sup> その鍛練の方法として狩猟なども好まれたようであるが、より数多くの鍛練の機会を作るために、屋敷の近くに馬場を求めるようになった。例えば『吾妻鏡』で頼朝が「由比の浦」「由比ヶ浜」に遊ぶというのは、殆んど騎射の鍛練のためであった。

ところで、この騎射術鍛練の様式であるが、大小様々の的とか、また、的までの距離の遠近等は、各武士団で必ずしも同じではなかったようである。これは、各武士団が「互いに対抗して成長してきたゝめ」当然と考えられることであって、「武芸の様式はもとより、狩猟の仕方から武具のつくり方まで相違がみられた」といわれる。従って、騎射術の鍛練においても、各武士団は、各々の故実に基いた様式で行われ、その技能を競い合っていたと考えられる。<sup>(8)</sup> これらの様式は、次第に統一されるようになるが、この中に、後年「馬上三つ物」と総称される等懸、流鏑馬、犬追物などの騎射術があった。しかし、この他にも「三々九」「八的」「四六三」など、『吾妻鏡』において、「作物」と総称されるような騎射術も行われていた。

「馬上三つ物」と云われる騎射術については、すでに幾つかの研究がなされ、その概要が述べられている。<sup>(9)</sup> そこで本稿では、中世の射芸の中から「作物」を選び、『吾妻鏡』を基礎資料としながら、特に「作物」の由来を中心として二、三の考察を試みる次第である。ちなみに、現在まで刊行されている日本体育史の概説書では、「作物」に関して全く言及されていない。この現実、中世の射芸を広く見た場合、片手落ちと云わなければならないだろう。本稿

に未だ至らぬ点があるとしても、敢えて「作物」をとりあげ、こゝに発表を試みる所以である。

# 注及び参考文献

- (1) 河合正治「鎌倉武士団の構造」、『日本歴史中世(1)』所収、二五九頁、岩波書店、昭四六。
- (2) 同右。

- (3) 高橋昌明「武士の発生とその性格」、『歴史公論』第二卷第七号所収、五五頁、雄山閣、昭五一。

- (4) 「弓馬の芸」と「兵の道」の關係を、例えば『吾妻鏡』の次のような用語から推察できる。

弓馬の両芸、人の聴<sup>ゆる</sup>すところ

弓馬の達者

治承四年十二月十日

治承四年十二月十九日

文治三年十一月二十五日

元暦二年十一月二十五日

建久四年三月二十五日

弓馬の芸

元暦二年六月五日

文治六年四月七日

建久元年八月十六日

建久三年六月三日

建長六年閏五月一日

建長六年閏六月一日

文治元年八月二十四日

文治三年十一月二十一日

弓馬に携るもの

文治五年九月七日

建久三年十二月十一日

建曆三年五月四日

文治五年十一月十八日

文治六年四月七日

建久二年八月一日

弓箭の達者

わが朝無雙の弓矢の達者

- 弓馬の勘能  
 弓箭に携わるの習  
 弓馬の陰徳  
 弓馬遊牧の旧友  
 武芸の眉目  
 弓箭の道  
 三徳の兼備（譜代の勇士、弓馬の達者、容儀神妙）  
 弓馬の道  
 武道にかなふ  
 文武の稽古  
 器量の士  
 高橋昌明「武士の発生とその性格」既出、五五頁。  
 「男衾三郎絵詞」『図説日本の歴史六』所収、七一頁、八七頁参照、集英社、昭四九。  
 河村正治「鎌倉武士団の構造」既出、二四四頁。  
 『吾妻鏡』建久五年十月九日、建久元年九月十八日、建久四年九月十一日の各記録参照。  
 馬上三つ物について  
 「大的鉢拜記」『群書類従第二十三輯武家部二』所収、七一頁、酣燈社、昭二六。  
 「就弓馬儀大概聞書」同右、一五九頁。  
 1、肥後和男「中世の射芸」『東京教育大学体育学部紀要』第三号所収、一〇七頁、昭三八。  
 2、丸山哲郎「日本武術におけるスポーツ性についての一考察——犬追物競技について——」『体育学研究』第二卷第七号所収、一七六頁。  
 3、黒木俊弘「佐賀県の稲佐神社流鏑馬馬場の研究」『体育学研究』第五卷第一号所収、二二頁。  
 4、藤井英嘉「鎌倉時代の馬上三つ物と武士に影響を与えられる仏教思想の研究」『北海道大学紀要（二部）』第一号所収、六〇一七頁。  
 5、太田尚充「南部家流鏑馬古文書について」『弘前大学医療技術短期大学部紀要』第一号所収、一八〇三七頁。  
 6、今村嘉雄『日本体育史』八七〇九一頁、不昧堂出版、昭四三。

- 7、水野忠文他著『体育史概説』二一九～二二一頁、杏林書院、昭四四。  
 8、川村英男『日本体育史』六三～六五頁、逍遙書院、昭四七。

# 一、『吾妻鏡』における「作物」

『吾妻鏡』に「作物」という用語を使用している記録は前後七回出現する。これを左に列挙する。

## 資料1

(一九〇)  
 建久元年八月十六日戊戌。馬場の儀也。先々會日。雖有<sub>レ</sub>流鏑馬競馬。依<sub>レ</sub>事繁。今年始被<sub>レ</sub>分<sub>二</sub>兩日<sub>一</sub>也。二品御出如<sub>二</sub>昨日<sub>一</sub>。爰流鏑馬射手一兩人。臨<sub>レ</sub>期有<sub>レ</sub>障。已及<sub>二</sub>闕如<sub>一</sub>。于<sub>レ</sub>時景能申云。去治承四年所<sub>レ</sub>与<sub>二</sub>景親<sub>一</sub>之河村三郎義秀。為<sub>二</sub>囚人<sub>一</sub>景能預<sub>二</sub>置之<sub>一</sub>。達<sub>二</sub>弓馬之藝<sub>一</sub>也。且彼時与<sub>二</sub>黨大略預<sub>二</sub>厚免<sub>一</sub>詔。義秀独非<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>沈淪<sub>一</sub>歟。斯時可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>召出<sub>一</sub>哉者。仰曰。件男可<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>斬罪<sub>一</sub>由下知畢。于<sub>レ</sub>今現存。奇異事也。然而優<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>。早可<sub>二</sub>召進<sub>一</sub>。但非<sub>二</sub>指堪能<sub>一</sub>者。重可<sub>レ</sub>処<sub>二</sub>罪科<sub>一</sub>。則招<sub>二</sub>義秀<sub>一</sub>。召<sub>二</sub>仰此旨<sub>一</sub>之間。射<sub>レ</sub>之詔。一品召<sub>二</sub>覽其箭<sub>一</sub>之処。箭十三束。鏑八寸也。仰曰。義秀依<sub>レ</sub>達<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>有<sub>二</sub>驕心<sub>一</sub>。与<sub>二</sub>景親<sub>一</sub>之条。案<sub>二</sub>先非<sub>一</sub>。今更奇恠也。然者猶可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>射<sub>三</sub>三流作物<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>失礼<sub>一</sub>者。忽可<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>其咎<sub>一</sub>者。義秀又施<sub>二</sub>其藝<sub>一</sub>。始終敢無<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>。是三尺手挾八的等也。觀者莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>感。二品变<sub>二</sub>醴陶<sub>一</sub>。住感荷<sub>二</sub>給云々<sub>一</sub>。(w)

## 資料2

(一九四)  
 建久五年十月九日丙寅。將軍家入<sub>二</sub>御小山左衛門尉朝政之家<sub>一</sub>。朝政兄弟以下一族群參。数輩祇候云々。於<sub>二</sub>此所<sub>一</sub>

召<sub>レ</sub>聚弓馬堪能等<sub>一</sub>。披覽旧記。相訪先蹤。令<sub>レ</sub>談流鏑馬以下作物射樣給。其故実。各所<sub>二</sub>相傳<sub>一</sub>之家説。面々意巧不<sub>レ</sub>准。仍令<sub>レ</sub>前右京進仲業<sub>一</sub>記<sub>レ</sub>彼意見給。是明年御上洛之次。有<sub>レ</sub>御<sub>三</sub>参住吉社<sub>一</sub>。為<sub>レ</sub>果<sub>二</sub>御宿願<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>堪能<sub>一</sub>之者。可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>射<sub>三</sub>流鏑馬<sub>一</sub>給<sub>上</sub>。京畿之輩。若及<sub>二</sub>見物<sub>一</sub>者。定以之可<sub>レ</sub>謂<sub>三</sub>東国射手之本<sub>一</sub>歟。然者無<sub>二</sub>後難<sub>一</sub>樣。兼日能擬<sub>三</sub>評議<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>用捨<sub>一</sub>。為<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>字<sub>三</sub>其宜<sub>一</sub>躰於若輩。有<sub>二</sub>此儀<sub>一</sub>云々。

其衆。

下河辺庄司行平

小山左衛門尉朝政

武田兵衛尉有義

結城七郎朝光

小笠原次郎長清

和田左衛門尉義盛

榛谷四郎重朝

工藤小次郎行光

諏方大夫盛澄

海野小太郎幸氏

氏家五郎公朝

小鹿島橘次公業

曾我太郎祐信

藤沢次郎清近

望月三郎重澄

愛甲三郎季隆

宇佐美右衛門尉祐政

那須太郎光助<sup>(2)</sup>

### 資料3

(一三二九)

寛喜元年六月廿七日癸亥。陰。今日於<sub>二</sub>馬場殿<sub>一</sub>。小山五郎長村。駿河次郎泰村。同四郎家村。宇都宮四郎左衛門尉頼業。氏家太郎。小笠原六郎時長等射<sub>三</sub>流鏑馬<sub>一</sub>・遠笠懸等。將軍家有<sub>二</sub>出御<sub>一</sub>。武州以下人々群参。其中小山三浦

兄弟。小笠原等。射<sub>二</sub>盡<sub>一</sub>作物等<sub>一</sub>。長村七違取止。秦村四六三遠立。家村八的。時長三尺取止等々。面々堪能催<sub>二</sub>感興<sub>一</sub>。緯已及<sub>二</sub>晚景<sub>一</sub>。將軍家聊御心神違乱之間。入御云々。<sup>(3)</sup>

## 資料 4

寛喜元年九月十七日辛巳。晴。將軍家為<sub>二</sub>海邊御遊覽<sub>一</sub>。御<sub>二</sub>出于杜戸浦<sub>一</sub>。是御不例御平癒之後御出始也。去七八月之間御不<sub>レ</sub>予御

顔腫云云。種々御祈禱在之。相州武州被<sub>レ</sub>參。有<sub>二</sub>犬追物<sub>一</sub>。射手大炊助有時主。足利五郎長氏。小山五郎長村。結城五郎重光。修理亮泰綱。武田六郎信長。小笠原六郎時長。長江八郎。佐原左衛門四郎。佐々木八郎已下數輩也。相州被<sub>レ</sub>仰云。

駿河次郎折節上洛。尤遺恨云々。駿河前司喜悅顯<sub>二</sub>顔色<sub>一</sub>云々。其後射訖。犬三十余疋。又御<sub>二</sub>覽<sub>一</sub>例作物<sub>一</sub>。長村時長等施<sub>二</sub>射藝<sub>一</sub>云々。未斜俄暴風起。少<sub>二</sub>其興<sub>一</sub>。及<sub>二</sub>申斜<sub>一</sub>。風猶不<sub>レ</sub>休之間。還御云々。<sup>(4)</sup>

## 資料 5

寛喜元年十月廿二日。丙辰。晴。將軍家令<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>由比浦<sub>一</sub>給。有<sub>二</sub>流鏑馬<sub>一</sub>。相摸四郎。足利五郎。小山五郎。駿河四郎。武田六郎。小笠原六郎。三浦又太郎。城太郎。佐々木三郎。佐々木加地八郎等為<sub>二</sub>射手<sub>一</sub>。三的之後。三々九

四六三以下作物等各射<sub>レ</sub>之。此藝朝夕非<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>御覽<sub>一</sub>受<sub>上</sub>之由。如<sub>二</sub>相州<sub>一</sub>。内々雖<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>諫申<sub>一</sub>。凡依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御入興<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>之。連々可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>御覽<sub>一</sub>云々。<sup>(5)</sup>

## 資料 6

寛喜二年正月廿三日。丙午。天晴。將軍家年首御濱出始也。渡<sub>二</sub>御由比浦<sub>一</sub>。先小笠懸。次遠笠懸。次流鏑馬。次



ケ所ある。

右の他に、「作物」という用語は使われないが、いかにも「作物」が演じられたと考えられる記録が次のように二

# 資料 7

(二三七)

大追物。廿疋。次小山五郎。三浦四郎。武田六郎。小笠原六郎。随別仰。射作物等。御入興無他云々。(6)

嘉禎三年七月十九日。甲午。北条五郎時頼、始可被射。来月放生会流鏑馬之間。此間初於鶴岳馬場有其儀。今日。武州為扶持之。被出流鏑馬屋。駿河前司以下宿老等参集。于時招海野左衛門尉幸氏。被談子細。是旧勞之上。幕下將軍御代。為八人射手之内。歟。故実之堪能被知人之故歟。仍見射藝之失礼。可加風諫之旨。武州被示之。射手之殊尤神妙。凡為生得堪能。由幸氏感申之。武州猶令問其失給。綵及再三。幸氏怒申之。挾箭之時。弓、一文字令持給事。雖非無其說。於故右大將家御前。被擬弓箭談議之時。一文字弓持事。諸人一同儀歟。然而佐藤兵衛尉憲清入道西行。云。弓、拳押立可引之樣可持也。流鏑馬。矢挾之時。一文字持事、非礼也者。偶案。此事殊勝也。一文字持事。誠弓引即可射。殊不見聊遲姿也。上、少揚。水走、可持之由、被仰下之間。下河辺行平工藤景光兩庄司。和田義政望月重隆藤沢清親等三金吾。并諫方大夫盛澄愛甲三郎季隆等頗甘心。各不及異議。承知訖。然者是計、可被直歟者。義村云。此事令聞此說。思出訖。正觸耳事候。面白候云々。武州亦入興。弓持樣。向後可用此說云々。此後。閣其儀一向被談弓馬。義村態遣使者於宿所。召寄子息等令聽之。流鏑馬笠懸以下作物故実。的草鹿等才学。大略究淵源。秉燭以後各退散云々。(7)

## 資料8

壽永元年六月七日丙午。武衛令<sup>(一八二)</sup>出<sup>(一八三)</sup>由井浦給。壯士等各施弓馬之藝。先有牛追物等。下河辺庄司。為御  
 合手。榛谷

四郎。和田太郎。同次郎。三浦次郎。愛甲三郎。為射手。次以股解沓。差長八尺串。召愛甲三郎令射給。  
 五度射之。皆莫不中。而武衛令打彼馬跡与的下給之處。其中間為八杖也。仍積此杖數。可定相廣之  
 馬場之由被仰出。其後有盃酌之儀。與宴移。及晚。加藤次景廉於座席絕入。諸人騷集。佐々木三郎盛  
 綱持來大幕。纏景廉懷持退去。則歸宿所加療養。依此事。止御酒宴令歸給云々。<sup>(8)</sup>

## 資料9

(一八七)

文治三年八月十五日癸未。鶴岡放生會也。二品御出。參河守範賴。武藏守義信。々濃守遠光。遠江守義定。駿河  
 守廣綱。小山兵衛尉朝政。千葉介常胤。三浦介義澄。八田右衛門尉知家。足立右馬允遠元等扈從。有流鏑馬。  
 射手五騎。各先渡馬場。次各射訖。皆莫不中的。其後有玃支。諏方大夫盛澄者。流鏑馬之藝窮。依慣  
 傳秀郷朝臣秘決也。爰屬平家。多年在京。連々交城南寺流鏑馬以下射藝訖。仍參向閑東事。頗延引之間。  
 二品有御氣色。日來為囚人也。而被斷罪者。流鏑馬一流永可陵廐間。賢慮思食煩。涉旬月之處。今日  
 俄被召出之。被仰可射流鏑馬之由。盛澄申領狀。召賜御既第一惡馬。盛澄欲令騎之刻。御既舍人密々  
 告盛澄云。此馬於的前。必馳于右方也云々。則於一的前。寄于右方。盛澄為生得達者。押直兮射之。  
 始終無相違。次以小土器。插于五寸之串。三被立之。盛澄亦悉射畢。次可射三件串之由。重被仰  
 出。盛澄承之。既雖思切生涯之運。心中奉祈念諏方大明神。拜還瑞籬之砌。可仕靈神者。只今垂  
 擁護給者。然後。鏃於平仁捻廻天射之。五寸串皆射切之。觀者莫不感。二品御氣色又快然。忽被仰厚免

云々。今日流鏑馬。

一番 射手 長江太郎義景

の立 野三刑部丞成綱

二番 射手 伊沢五郎信光

の立 河勾七郎政頼

三番 射手 下河辺庄司行平

の立 勅使河原三郎有直

四番 射手 小山千法師丸

の立 浅羽小三郎行光

五番 射手 三浦平六義村

の立 横地太郎長重<sup>(9)</sup>

# 注及び参考文献

(1) 新訂増補 国史大系 『吾妻鏡第二』 三九一～三九二頁、吉川弘文館、昭四九。

(2) 同右。 『吾妻鏡第三』 八六頁。 五一四頁。

(3) 同右。 『吾妻鏡第三』 八六頁。 八八頁。

(4) 同右。 八八頁。

(5) 同右。 九一～九二頁。

(6) 同右。 二〇〇頁。

(7) 同右。 『吾妻鏡第一』 八八頁。

(8) 同右。

(9) 同右。二六九～二七〇頁。

## 二、「作物」という射芸名称について

この項では、「作物」という射芸の名称が、史料の上でどのような特徴をもって使われていたかを考察する。

第一の特徴は、これは、ある特定の単一種目に対する名称としてではなく、数種目の射芸に対して、包括的な名称として使われていたことである。前記『吾妻鏡』の資料を例にとれば、次のような個々の種目に対して、すべて一括して「作物」と称していた。

- 1、三尺（三々九とも書く）
- 2、手挾
- 3、八的
- 4、七違
- 5、取止（取留とも書く）
- 6、四六三
- 7、遠立

右の他に、別の史料には「こいたれ」<sup>(1)</sup>、「わきほう」<sup>(2)</sup>（わきほそとも書く）、「いしく」<sup>(3)</sup>、「ふりふり」<sup>(4)</sup>という名称の射芸も「作物」の一種目として登場してくる。ただし、これらは『吾妻鏡』以降の史料による。

元来、射芸における各種目の名称は、その種目の発生の由来や、整えられた形式を契機として誕生すると考えられる。歩射、騎射ともに、例えば、的の大きさ、的の形、的の材質、的の数、的が二個以上の場合には的との間隔、射る位置からのまでの距離、的串の大きさや形、射手の服装、さらに騎射の場合は、馬走路の長さや幅等の形式、あるいはまた、弓や矢の特徴等、諸々の形式上の相違から、各種目の名称が固有のものとして誕生すると考えられる。

従って、右に列挙したような「作物」に包括される各種目も、それぞれ発生の由来や射芸としての形式をもち、固有の名称が与えられているのである。しかし、それにもかゝわらず、これらが一括して「作物」と称されている。こゝに「作物」という名称の特徴がある。「作物」としての「三尺」、「作物」としての「手挟」、あるいは「八的」と呼称されることはあっても、流鏑馬や笠懸のように、独立した射芸として呼称されていない。『吾妻鏡』に登場する「作物」に対して、鎌倉武士の認識は、これを高く評価することはあっても、なお流鏑馬、笠懸と同格の、独立した射芸種目として受けとめていないようである。この理由は当然問われなければならないだろう。

第二の特徴は、第一と関連はあるが、「流鏑馬、笠懸、犬追物」等の射芸とは、対比的に、判然と区別して使用されているということである。再び前記『吾妻鏡』の資料を例にとれば、次のように使用されている。

「令<sub>レ</sub>談<sub>二</sub>流鏑馬以下作物射様<sub>一</sub>給」 資料2

「先小笠懸、次遠笠懸、次流鏑馬、次犬追物（中略）随<sub>二</sub>別仰<sub>一</sub>、射<sub>二</sub>作物等<sub>一</sub>」 資料6

「流鏑馬、笠懸以下作物故実」 資料7

先にみたように、射芸「作物」には、「三尺」「手挟」「八的」等数種目が含まれているにもかゝわらず、それ

らの単一種目の名称が出てこないで「作物」と一括され、しかも、他の単一種目「流鏑馬、笠懸」と対比されている。換言すれば、単一種目である「流鏑馬、笠懸」と、数種目を合せ含めた「作物」と、ほぼ同格にみているということである。もともと、「笠懸」には「小笠懸」「遠笠懸」の区別があったし、笠懸を実施する目的、方法、場所などから「神事笠懸」「（ヒル）聞笠懸」「百番笠懸」「七夕笠懸」と呼ばれる場合はあったが、こゝでは、これらの内容に言及することはそれ程重要ではないだろう。問題は、数種目を合せ含む「作物」の個々の種目が浮かびあがらないで、これを一括して「作物」と呼称し、しかも、流鏑馬、笠懸という単一種目と対比しているということである。

また、資料6にみるように、「笠懸、流鏑馬、犬追物」の後に、「別の仰せに随ひて」「作物」を射ている。これは、「作物」を射る時の作法が、笠懸、流鏑馬と異なるという点で特徴がある。笠懸や流鏑馬を射るのに「別の仰せに随ひて」これを実施するという例はなく、「作物」を射る場合にのみこのような作法があったと考えられる。これは、「作物」を射ることの意味が、笠懸、流鏑馬を射るのと異なるという認識が鎌倉時代にあったと考えられ、追求されなければならないところであろう。

たゞ、『吾妻鏡』では、「別の仰せに随ひて」という表現は、右の一例のみである。それで、他の史料を求めれば次の例がある。

(二二九)  
延応元年三月廿八日

一、わきほそハ 三まとの心なるへし

一、四六三ハ (三々九)さんくくの心なるへし

たゞし このやふさめハ (名)(受)志にてなをうけ (筋)すしなり

一、こかさかけ(小笠懸)のまとハ 一寸あるいハ二寸

くしのなかさ一尺七寸

一、大まと乃寸方三尺五寸

つゑ三十三

(通笠懸)

一、とをかさかけ つゑ九つへ

(鹿)

一、草しゝ(鹿) まろ物 つへ十一(5)

右の『南部家流鎗馬古文書』にみる「わきはそ」「四六三」は、こゝでは「やぶさめ」と称しているが、この呼称の相違はとにかくとして、注目すべきは、「わきはそ」も「四六三」も「志にて名を受け」て射るのが「筋なり」と表現している点である。これはおそらく、「わきはそ」や「四六三」は、誰でもが射られるという射芸ではなく、射手自身が主人(おも)に対して意志表示をし、然る後に主人の指名があつて実施できるといふ意味か、あるいは、始めから、主人の意志のもとに、指名を受けたものだけが実施できるという意味か、そのどちらかであろう。何れにしても、資料6にあるように、「作物」は誰でもが実施できるといふ射芸ではなく、特に「別の仰せに随ひて」のみ実施できる射芸であると考えるのが妥当のようである。

以上、「作物」という名称の使われ方の第二の特徴を要約すれば、一つは、「流鎗馬、笠懸、犬追物」等の単一種目と対比的に使われているということ、もう一つは、右と関連するが、「流鎗馬、笠懸、犬追物」等の射芸とは異つた意味合いをもつ射芸と認識され、使用されているということである。

- (1) 「流鏑馬次第」『群書類從第二十三輯武家部二』所収、七五頁。
- (2) 同右。
- (3) 「了俊大草紙」『統群書類從第二十四輯上武家部』所収、三四九頁。
- (4) 「丸物草鹿之記」同右、五二〇、五二一頁。
- (5) 太田尚充「南部家流鏑馬古文書について」既出。

### 三、射芸「作物」の由来

この項は、「作物」という射芸の由来を考察するのが目的である。また、前項で追求すべき問題として残しておいた次の二点についても考察を試みたい。何れも「作物」の由来に深いかゝわりをもつ問題と考えるからである。

#### 1、「作物」とは、「三尺」「手挾」「八的」等、数種目を包括した名称である。

この「作物」に含まれ、しかも固有の射芸であるはずの「三尺」「手挾」「八的」等の各単一種目について、すくなくとも鎌倉武士たちは、同じ単一種目である「流鏑馬」「笠懸」等と比較し、同格と認めていない。「作物」と一括してしまうことによって、はじめて「流鏑馬」「笠懸」等と比較し得る射芸と受けとめていた。これは、射芸としての相互の形式上の違いによるばかりでなく、「作物」に対しては「別の仰せに随」ってはじめで射ることが許されるという特殊性があったと考えられる。

さて、「作物」という射芸の由来について、細部にわたってはなお不明の点が多い。『吾妻鏡』の前記資料2には「弓馬の堪能等を召し聚め、旧記を披覧し、先蹤を相訪ひ、流鏑馬以下作物の射様を談ぜしめ」ている記録がある。また、同じく資料7にみるように、「作物故実」について「流鏑馬、笠懸」等とともに「大略淵源を究め」という



記録もある。しかし、「作物故実」の具体的内容は述べていない。他の箇所においても「作物故実」の内容に触れるような記録はない。

また、管見にすぎないが、『陸奥話記』『将門記』の他、いわゆる京都側の史料といわれる『中右記』『長秋記』『玉葉』『明月記』『台記』『兵範記』『百鍊抄』等には、相撲、賭弓、競馬、騎射、流鏑馬、笠懸等の記録は散見されるが、「作物」については、その用語すら発見できない。また、「作物」の故実を推察するに足る記述にも接することができない。

右のような、史料不足という事情をふまえて「作物」の由来を考察するのであるが、その第一に、「作物」という名称の出現と、実施された時期について推測を試みたい。

最初に、「作物」という名称の出現であるが、現在のところ、『吾妻鏡』建久元年（一一九〇）八月十六日（資料1）にみる「三流れ作物」という熟語の中の「作物」が初見と考えられる。現代の辞典類で「作物」を採りあげているのは、『現代国語大辞典（全二十巻）』（大修館）のみと思われるが、この用例の第一に、やはり建久元年八月十六日<sup>(1)</sup>があげられている。

しかし、この日をもって、「作物」に含められる射芸が始めて実施された時期と断定はできないであろう。おそらく、もっと早くから行われていたに違いないと考えられる。これは、「建久元年」という時期に、「三尺」「手挾」「八的」をもって「三流れ作物」と呼称していたという事実を、どのように解釈するかということとかわりがある。結論的には、右の三種目は、「建久元年」以前に、すでに「三流れ作物」と固有の名称が付される程、鎌倉武士たちの間に定着していたと考えることができよう。繰り返すようであるが、「作物」に含められる様々な射芸の中でも、右の三種目は、最も早くから行われ、親しまれてもいた、いわば、「作物」を代表するような種目であったので

あろう。このことを裏付けるように、『新猿楽記』の次の記録をあげることができる。

中、君、夫、天下第一、武者也。合戦。夜討。<sup>ハセナミ</sup>馳射。待射。<sup>ユミ</sup>照射。<sup>トセシ</sup>步射。<sup>ウツシ</sup>笠懸。流鏑馬。八ッ的。三々九、手挾等の上手也。<sup>(2)</sup>

『吾妻鏡』よりも早く成立していた『新猿楽記』に、すでに「三尺」「手挾」「八的」は登場しているのである。これは、この種目が実施されていたということにもなる。後年『吾妻鏡』にみえる「作物」の、他の種目も実施されていたのかも知れないが、『新猿楽記』の著者からすれば、すくなくとも容易に脳裡に浮かぶ種目であったから、先ず書き述べたのであろう。このように、「三尺」「手挾」「八的」は、「建久元年」以前から行われ、実際に見聞する機会もあって、人々の口に膾炙していた種目であったと考えられる。

新井白石が『本朝軍器考』で、

八的、三々九手挾ナドトイフ事ハ、<sup>(原頼朝)</sup>右大将ノ時ヨリ既ニ見エタレバ、其ノ来タル事久シキ事トコソ見エタレ。<sup>(3)</sup>

と述べている。頼朝が、たとい「作物」に含められる数種目の射芸を創作したとしても、それ以前にすでに行われていた「作物」があったのである。

しかし、右の『新猿楽記』の記録で、さらに注意すべきことは、この三種目に「作物」の名称を付していないというものである。このことは、「三尺」「手挾」「八的」のような射芸種目は、平安時代末期に、すでに実施されてい

たと考えられるにもかゝらず、これらの種目に対して、包括的に、「作物」という名称を使っていなかったかも知れないということである。もし包括的に「作物」の名称を使っていなかったとすれば、当然のことながら、これらの種目に対して、流鏑馬、笠懸と同じように、単一の射芸種目の名称をもって、「三尺」「手挟」「八的」と、一つ一つ記述されることになるわけである。『新猿楽記』の右の記録は、当時「作物」という包括的な名称が使われていなかったかも知れないということを示唆している。

しからば、『吾妻鏡』の「三流れ作物」の「作物」という包括的な名称は、いつ頃から使われるようになったのであろうか。「三尺」「手挟」「八的」をもって、いきなり「三流れ作物」と呼称する前に、この他の種目「七違」「取止」「四六三」「遠立」等の多様な射芸を一括して「作物」と呼称していた時期があったと考えられる。この中から右の三種目を特に「三流れ作物」と呼称するようになったのであろう。これが『吾妻鏡』の建久元年（一一九〇）の記録に出現したのであるから、「作物」という包括的な名称出現はこれ以前となろう。しかし、この時期の推定は難しい。

『吾妻鏡』の記録から、敢えてこの時期を推定すれば、寿永元年（一一八二）六月七日（資料8）の愛甲三郎の射芸や、文治三年（一一八七）八月十五日（資料9）の諏方盛澄の射芸が実施された頃と云えるであろう。

この推定は、この時の射芸が、いずれも源頼朝の命令によって実施されていること、また、既存の、固有な名称をもつ射芸ではなかったということによる。いわば、頼朝、あるいは頼朝側近の弓馬の芸に達する御家人によって開発された、このような射芸を「作物」と称するようになったのではないかと考えられる。

永正九年（一五一二）六月の『笠掛記』に

遠笠掛始之事。右大将家（源頼朝）之御時に、もろもろの作物品々極められき。<sup>(4)</sup>（以下略す）

とある。後代の武将も、頼朝が「作物」という名称のもとに、新しい射芸方法を創作し、これを通して、弓馬の芸に盛んな意欲を示していた事実を認めている。

このように、「作物」という包括的な名称が出現する時期を推定すれば、前述した『吾妻鏡』の右の二件によって十二世紀後半と考えられる。

ここで、さらに述べておかなければならないことがある。それは、頼朝や、頼朝側近の御家人によって創作された新しい射芸を、「作物」に含めるようになったというばかりでなく、既存の、固有名称のある射芸の一部をも「作物」に含めるようになったという点についてである。例えば、先にみたように、『新猿楽記』に出現した「三尺」「手挾」「八的」等、平安時代末期に固有な名称のもとに実施されていた射芸をも、「作物」に含めて呼称するようになったという点についてである。

この場合、既存の射芸の中で、何を「作物」に含め、何を除いたのか、ということが問題になる。これを推定するに、資料2の、「流鏑馬以下作物の射様」とか、資料7の、「流鏑馬、笠懸以下作物の故実」などの表現にみるように、流鏑馬、笠懸、犬追物、牛追物等を除いた射芸のすべてを「作物」に包括してしまったのではないかと考えられる。これらの理由と現実について述べることは別の機会にゆずることとし、とりあえず、「作物」という名称の出現と、実施された時期等の推定について、次のようにまとめておきたい。

- 1、「作物」という名称は、『吾妻鏡』により、「建久元年八月十六日」が初見と推定される。
- 2、実施されていた時期は、『新猿楽記』にみるように、十一世紀平安末期あたりからと推定される。

3、しかし、右の場合「作物」という名称のもとに実施されていたかどうかは疑わしい。「流鏑馬」「箆懸」「三々九」「手挟」「八的」というように、それぞれ単一種目の名称のもとに実施されていたのかも知れない。

4、「作物」という名称は、源頼朝の勢力がほど安定した十二世紀後半に、頼朝の射芸奨励から使われるようになったと推定される。これは、頼朝、あるいは頼朝側近の弓馬の芸に秀れた御家人によって創られた新しい射芸に対して、また、既存の射芸の一部に対して、包括的な名称として使われたと推定される。

「作物」の由来に関する第二の考察は、「作物」という用語の意味と、「作物」に包括される射芸が、どのように受けとめられていたかという二つの点についてである。

先ず「作物」という用語の意味であるが、『吾妻鏡』には、直接この用語の意味について述べている箇所はない。後年、江戸時代中期の有職故実研究家伊勢貞丈は、その著『貞丈雑記』に、

草鹿、円物、大的、小的の類を作物と云。流鏑馬、箆懸、犬追物の類を馬上の作物と云。作物とは、弓馬稽古の為に作りたる物也。<sup>(5)</sup>

と述べ、また、別の箇所で、

三流の作り物、皆騎射に見ゆ。<sup>(6)</sup>

とも述べている。

すなわち、伊勢貞丈によれば、弓馬の芸を稽古するために工夫され、作り出されたすべての射芸の方法を「作物」と総称するという解釈である。「作物」という用語を、このような広い意味に解釈する立場に立てば、「流鏑馬、笠懸、犬追物の類」も、「草鹿、円物、大的、小的の類」も、当然「作物」と称することになるわけである。また、貞丈は「三流の作物」をも含めて、騎射のすべてを「馬上の作物」と称し、「草鹿」「円物」以下の歩射のすべてを、おそらく「歩立作物」と称していたものであろう。

以上のように、「作物」を「弓馬稽古の為」に工夫され、創り出された射芸の方法であるという考え方は、完全ではないが、これを誤りとして必らずしも否定できない。このような考え方は、『吾妻鏡』にみられる「作物」に対しても、ある程度通用するからである。

例えば、前記資料8の、寿永元年（一一八二）六月七日おける「牛追物」という射芸の後に、「次に股解沓をもつて長八尺の串に差し、愛甲三郎を召して射しめたまふ。五度これを射るに、皆あたらざといふことなし。しかうして武衛（頼朝）かの馬の跡の下的（ました）下とを打たしめたまふのところ、その中間八杖（つゑ）たり。よってこの杖の数を積り、相廣（あひひろ）の馬場を定むべきの由仰せ出さる（以下略）」という記録がある。これは、今までに無かった、従って固有名称もない新しい射芸、すなわち、新しい射芸の方法の創作に関する記録である。いわば、「弓馬稽古の為」に、新しい射芸の方法を創り出していく過程の一端を物語る記録である。こゝでは、「作物」という用語こそ使われていないが、的に「股解沓」を臨機応変に用い、命中した時の馬の位置と、この「股解沓」という的までの距離を計ってみるなど、いかにも「弓馬稽古の為」の射芸の方法を創り出す過程を示唆する記録である。このようにして創り出された射芸が、たといこれに固有の名称が与えられたとしても、「作物」に包括されることになったものであろう。従って「作物」

という用語に対して、伊勢貞丈のような解釈も成り立つということは否定できないのである。

しかし、なお不充分なところもある。この不十分な点を考察する前に、回り道にはなるが、伊勢貞丈の「作物」に対する考え方の次の点を確認しておきたい。

その一つは、前述したように、「流鏑馬、笠懸、犬追物」を「作物」の中に含めていることである。これは『吾妻鏡』が「作物」と区別し、むしろこれらの射芸と対比的に表現していることと異っている。鎌倉時代と違った見解を示すものであろう。

もう一つは、「流鏑馬、笠懸、犬追物」に対して、「作物」の中でも、特に「馬上の作物」と呼んでいることである。『吾妻鏡』では、「作物」という表現はあるが、特に「馬上の」という表現をしている記録はない。これも鎌倉時代と違った見解を示すものと考えられる。

しかし、右の二つの件は、江戸時代の『貞丈雜記』に始めてみられることではない。南北朝時代の武将、小笠原信濃前司貞宗の著、康永元年（一三四二）成立の『目安』に、すでに次のようにみられる。

歩射之營雖<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>其德<sub>一</sub>。騎射之勦猶堪<sub>レ</sub>禦<sub>二</sub>其敵<sub>一</sub>。繇<sub>レ</sub>茲<sub>マ</sub>馬<sub>上</sub>作物雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其数<sub>一</sub>。當時所<sub>レ</sub>用者、流鏑馬、笠掛、犬追物也。流鏑馬、笠掛面々雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其益<sub>一</sub>。猶<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>犬追物<sub>一</sub>者射馭之簡要驅逐之妙術也。（以下略）<sup>(7)</sup>

右の文は、「応永廿三年（一四一六）『騎射秘抄』にも大きく引用されている。小笠原貞宗は、当時第一級の騎射の達人であり、故実にも通じていた武将であった。<sup>(8)</sup> 弓馬の芸や武家礼法に関し、後代への影響力が極めて大きかった<sup>(9)</sup>

人物であつた。伊勢貞丈も、小笠原貞宗に学びところ多かつたものと思われる。

鎌倉時代に「流鏑馬、箠懸、犬追物」が「作物」と対比的に考えられていたのが、南北朝時代には「馬上の作物」という表現のもとに、これらの射芸が「作物」の代表のように考えられ、さらに足利時代には、「馬上の三物」と一層強調して表現されるようになった。現代の体育史書では、「流鏑馬、箠懸、犬追物」をもって直ちに「馬上の三物」と称していることが多いが、この表現に至るには、それなりの経緯のあつたことを指摘しておきたい。

さて、論点を元に戻すことにするが、さきに、「作物」という射芸は、「弓馬稽古の為」に工夫され創り出された方法であると考えただけでは、なお不充分であると述べた。それでは、「作物」の理解において何が不充分なのか。どのように理解を拡め深める必要があるのか。この点に関し、『吾妻鏡』を通して考察をすゝめることにしたい。この件はまた「作物」が鎌倉武士たちにとって、どのように受けとめられていたかということゝ深いかわりがあるので、次に述べることは、「作物」の由来に関する第二の考察の、後半の部分に該当するところでもある。

「作物」は、確かに弓馬の芸を鍛練するための一つの稽古法として実施していた場合もあるが、その他に、武者の面目をかけ、生死を貫ぬく真剣勝負そのものゝ覚悟で実施していた場合もあった。「作物」の本質は、むしろ後者の状況にあらわれているのではないかと考えられる。また、鎌倉武士たちの「作物」に対する認識も、後者の立場に立つて受けとめていたのではないかと考えられる。

右の例として、前述した資料1の、「建久元年八月十六日」の「三流れ作物」を射た時の状況をあげておきたい。

当日の、問題の射手は河村三郎義秀である。彼は、弓馬の芸に達する武者ではあつたが、「去ぬる治承四年（一一八〇）、<sup>（大庭）</sup>景親に興<sup>（くみ）</sup>」して源頼朝に反したゝめ、「囚人として<sup>（大庭）</sup>景能」に預かり置かれるという身分であつた。従つて、八月十六日の鶴岡八幡宮馬場の儀に参加できる立場ではなかつた。ところが、「こゝに流鏑馬の射手一兩人、期<sup>（き）</sup>に臨み



て障りあり。すでに闕如に及ぶ」という事態が生じ、にわかに呼び出されて流鏑馬を射ることになった。この流鏑馬は難なく射納めたが、しかし、この時に彼の用いた「箭十三束、鏑八寸」という大振りの矢を見て、頼朝は「義秀弓箭に達するによって驕心あり」とがめたのである。そして頼朝は、その流鏑馬だけで満足できず、さらに、「三尺」「手挾」「八的」（三流れ作物）の射芸を実施するよう命ずる。「驕心」をにくみ（義秀に果して驕心があったかどうかは別として）、そしてこれをとがめた頼朝が、なぜ右の種目を特に選んで命じたのか問う必要がある。こゝは、鎌倉武士たちの「作物」に対する受けとめ方を示唆する重要な箇所である。これを推察するに、右の三種目は、おそらく流鏑馬より高度な射芸であり、たとえ流鏑馬に成功しても、この種目には失敗するかも知れないと考えたからである。もし失敗すれば、「たちまち」に斬罪に処せられるという文字通り土壇場であった。しかし義秀は「またその藝を施し、始終あへて相違」なく、実力を充分に發揮して面目を得たというのである。

以上の記録で注目すべきことは、義秀の弓馬の芸の見事さと、それに感銘した頼朝の態度もさることながら、「三尺」「手挾」「八的」という「三流れ作物」の、射芸としての意味である。すなわち、右の記録から判断すれば、前述したように、頼朝は、流鏑馬より高度な射芸として受けとめていたと考えられること、また、一方の射手義秀にすれば、その成功不成功が斬罪か否かにかゝわっていたということ、同時に、弓馬の芸を道とする武者の面目を問われるということ、極度の緊迫感をもたざるを得ない、容易ならざる厳しい射芸と受けとめたに違いないということである。このように、「作物」は、弓馬の芸を鍛練する一つの稽古法としてよりも、武者の生命を賭するに値する高度な射芸と認識されていたのではないかと考えられる。

次の例として、資料9の文治元年（一一八七）八月十五日の記録をあげたい。これは、「諏方大夫盛澄」の射芸の状況に関する記録である。彼は「流鏑馬の藝を窮」め、「秀郷朝臣の秘決ひけつを慣なひ傳たづなふる」という弓馬の達人であった。

しかし、「平家に属し、多年在京し」「関東に参向する事すこぶる延引」したため、頼朝の勘氣を被って囚人の身となっていた。幕府としては、直ちに断罪にすべきであつたろうが、そうすれば、彼に伝わる弓馬の芸が途絶えることを惜んで、そのまゝになつて今日に及んでいたのであつた。それが、鶴岡八幡宮の放生会にちなむ馬場の儀に急に呼び出され、流鏑馬を射ることになった。実施に當つて「御厩第一の惡馬」をあてがわれたが、同情する「御厩の舍人」の機転と、盛澄の卓越した馬術で惡馬の癖をおさえながら、無事に流鏑馬を成功裡に納めることができた。

ところが、この後の射芸が注目すべきことなのである。それは、この流鏑馬の後に行われた射芸には「作物」という用語こそ使われていないが、実施の過程からみて、これが「作物」であろうと考えられる点である。もう一つは、いかに高度な射芸であつたかという点である。

さて、流鏑馬後の射芸とは、「次に小土器こかわけをもつて」地上高さ「五寸の串に挿さしみ」、これを的として三つ立てるの  
でこれを射よ、というものであつた。これは、どちらかと云えば流鏑馬に似た射芸ではあるが、しかし、既存の、固有の形式をもつ射芸種目ではない。いわば、機に臨んで作られた射芸の形式である。これこそ「作物」ともいふべき射芸であろう。この「小土器」の大きさや、三つの「小土器」の間隔、馬走路と「小土器」までの距離など不明であるが、疾走する馬上からこの「小土器」を射当てることは、相當に高度な技術を要するものと考えられる。

射芸の難易度は簡単に判定できないであろうが、的の大きさ、的の数、的までの距離がその判定基準の中に入るのはないかと思われる。ちなみに、寛正五年（一四三〇）十一月の『就弓馬儀大概聞書』の「はさみ物立事」<sup>m</sup>では、  
的は「ひろさ四寸四方」「串の長さ土の上六寸」とある。もっとも、「はさみ物」の的として串に挟む物体は、「ひろさ四寸四方」の檜板の定形ばかりでなく、例えば、栗の葉、桜の花、あわび貝、沓等々、木の葉、草の葉をはじめ多様であつて、大きさだけでの比較をすれば、もっと小さなものもあつたかも知れない。しかし、「はさみ物」の的の

数は一つである。的が小さく、その数が一つという射芸には「小笠懸」もあった。「小笠懸」の場合は『弓馬問答』によれば「的ハ四寸四方、くしハ一尺、二寸ハ土へ入、二寸ハ的をはさむ。串は藤鞭也。的の遠サ、さくり（馬走路）より八寸<sup>四</sup>」とある。応永二十七年（一四二〇）八月の『法量物<sup>四</sup>』にも、ほど同様の大きさが示されている。かなり小さなものではあるが、「小土器」と比べて大同小異であったと考えられる。

しかし、地上五寸の串に「小土器」を挟んだ的を、一つでなく三つ射当てるところにこの射芸の難しさがあったと考えられる。それにもかゝらず、盛澄は「ことごとく射をわんぬ」と――すなわち、この三つの的も見事射当てたというのである。

しかし、これで彼の射芸が終ったのではなかった。頼朝はさらに、「件の三箇の串を射るべきの由」「重ねて」命じたのである。先程の地上五寸の串に挟まれた「小土器」は、射当てられた時に粉々に散ったであろうから、三つの串だけが地上に残っていたのであろう。今度は、何も挟んでいないその串だけを的として射当てよとの命令なのである。これは「小土器」を的とした時よりも一層困難な射芸であることは明白である。頼朝は、あくまでも盛澄の「秀郷朝臣の秘決を慣ひ傳ふる」という射芸の極致を試さんものと求めたのかも知れない。あるいは、盛澄を窮地におとしめようと考えたのかも知れない。

「作物」という射芸は、例えば右のように、最初の三箇の「小土器」という的から、さらに何もない串だけを的にするというように、臨機応変に高度化させていくところに特徴があると推察される。

一方、この命令を受けた射手盛澄は、極度の緊張に達したことであろう。それにもかゝらず、彼は、無心になってこの困難的な向うことになる。事ここに至れば、これは単なる「弓馬の稽古」ごとではないのである。この時の「盛澄これを承り、すでに生涯の運を思ひ切る」という表現は、弓馬の藝を極めた武者として、生死を貫徹してはじ

めて自己の頂点に至り得るという盛澄の心境をよく捉えていると云わねばならない。さらに盛澄は「心中に諏訪大明神を祈念したてまつり、瑞籬みずがきの砌きに拝還して、霊神に仕ふべし」と、敬虔に心底を解放して平伏するのである。「すでに生涯の運を思ひ切るといへども」、さらに「諏訪大明神を祈念し」、「霊神に仕ふべし」というのは何如なる心境なのであろうか。この心境は明確に捉え難いが、おそらく、「すでに生涯の運を思ひ切るといへども」なおかつ心中に不安が残って諏方大明神に祈るというのではなく、むしろ諏訪大神という絶対への帰一、あるいは絶対への没入を怠ずるという心境ではなかったかと思う。そして、「只今擁護ようごを垂れたまへてへり」と確信するに至るのである。すなわち、心底より信仰する諏方大明神より、確かに擁護があるという託宣を感じ得し、信念に徹するのである。すでに清澄な心境であつたであらう。「しかる後」に、彼は秘術を尽して「件の三箇の串を射」、見事に「五寸の串皆これを射切る」のである。ことは成功裡に終つた。彼は武者として「兵の道」を身を以て最高に示したのである。盛澄の精妙なる射芸の極致に「観る者感ぜずといふことなし。二品（頼朝）の御気色また快然として、たちまちに厚免を仰せらるゝ云々」と。彼は許されて御家人に列せられ、以後、事ある毎にその秀れた射芸を披露するようになるのである。<sup>44</sup>

以上の二例には、何れも「作物」という用語は使われていないが、その過程から判断して、これこそ新しい「作物」の実施場面の状況を記録したものと考えられる。しかも実施に当っては、単なる「弓馬稽古の為」という、いわばやりなおしの利く状況ではなく、射手として、そこに生死がかけられているという深刻な状況であつた。これは、両者とも囚人という立場であつたからかも知れないが、「作物」という射芸そのものが、このような厳しい性質をもつ射芸であり、高度な射芸であつたと考えられる。

次に、右のような囚人ではなく、御家人の実施した例として、資料5の、寛喜元年（一二二九）十月二十二日に行

われた「作物」の状況を述べた記録をあげておきたい。

こゝでは、射手の心境もさることながら、「作物」に対する鎌倉武士の姿勢、あるいは「作物」の受けとめ方に力点をおいて記述されている。すなわち、射芸「作物」に対して、「この芸、朝夕御覽ぜらるべき事にあらざる由、相州（北条時房）のごとき、内々諫め申さるといへども、およそ御入興あるによつて、これを止めらるゝに及ばず、連々御覽ぜらるべしと云々」という箇所である。

「作物」を「この藝、朝夕御覽ぜらるべき事にあらざる由」と述べているのは、どのような意味なのであろうか。これはおそらく、「作物」という射芸は、普通の稽古法としての弓馬の芸のように、軽々に実施できるといふ性質の射芸ではないと聞き知っている——という意味であらう。そして、このようなことを誰からの伝え聞きかと問われるなら、弓馬の芸に詳しい宿老か、いや鎌倉武士なら、皆このように受けとめているのだと答えるに違いない。「作物」に立ち向う射手にとっては、まさに、戦場におけると同じように、一射に生死をかけ、その成功不成功は、直ちに当人の武者としての面目に帰するといふ厳しい性質をもつ射芸であつたのであろう。従つて、人の上に立つほどの者がなまじい「作物」を見たいなど、短時日に度々輩下に求めるのは、武者の面目を軽視する理不尽の所業と考えられていたのではなかったか。

「作物」を射るに当つては、資料6の、寛喜二年（一二三〇）閏正月二十三日の記録にあるように、「別の仰せに随ひて」これを行う——すなわち、主人が「作物」<sup>（あそび）</sup>射手たることを名誉とする武者を求め、それ相当の決意ある射手に命じて、はじめてこれを実施させる——というのが、「作物」実施の場合の作法ではなかったかと考えられる。

ところが、資料5の場合、四代將軍九条頼経は、年齢僅か十三歳であつた。頼経は、二歳の時に京都から鎌倉に下向し、鎌倉武士の射芸に対する誇りについて、いさゝか知るところあつたにしても、なおその真意を解するに浅く、

時において軽率な言辭があつたのであろう。幕府の重要な位置にあって、しかも円熟せる五十五歳の北条時房に「内々諫め申さるといへども」、その心底を見抜くことができなかったものであろう。將軍頼經が「およそ御入興あるによつて」、「作物」の実施を度々求めるので、さすがの時房も「これる止めらるゝに及ばず」という状況であつた。結果的には、頼經の興に任せて「連々御覽ぜらるべし」という事態に至つていたのである。頼經は、名うての射芸の達人たちが、真劍そのもので「作物」に立ち向い実施するのを、「蹴鞠」に接するような心境で覽ていたのではないかと推察される。

しかし、『吾妻鏡』における「作物」——鎌倉武士が受けとめていた「作物」——は、単なる「弓馬稽古の為」としての方法ではなく、また、例えば將軍の興のために、軽々に実施できるという射芸でもなかったのである。「作物」は前の二例でもみたように相当に高度な射芸であり、これに立ち向う射手は、武者としての「兵の道」そのものが問われ、己れの面目を決するという、厳しい性質をもつ射芸であつたと考えられるのである。

以上、「作物」という用語がどのように使われていたかについての概要と、「作物」という射芸が、鎌倉武士たち、どのような意味をもつて受けとめられていたかについて、これを実施せしめる側の心境と、実施する射手の側の心境とを例を挙げてその概要を述べてみた。

#### 注 及び参考文献

- (1) 『現代国語大辞典』以外の、諸橋轍次『大漢和辞典』全十二卷（大修館）、『日本歴史大辞典』全十二卷（河出書房）、『日本史用語大辞典』全三卷（柏書房）や、古くは『節用集』『倭名類聚抄』『和訓栞』『和漢三才図会』『嬉遊笑覧』には採りあげられていない。また、辞典ではないが、日本乗馬協会編『日本馬術史』全四卷（原書房）にも記述はない。
- (2) 「新猿楽記」『群書類従第九輯文筆部』所収、三四二頁。なお『新猿楽記』は、藤原明衡により十一世紀の始め頃成立とい

われる。(角川『日本史辞典』)

(3) 新井白石「本朝軍器考卷四」『新訂増補故実叢書』第三十五回所収、四二頁、吉川弘文館、昭二九。

(4) 「笠掛記」『群書類從第二十三輯武家部二』所収、七六頁。

(5) 「貞丈雜記」『新訂増補故実叢書』所収、四八八頁。

(6) 同右、四八九頁。

(7) 「目安」『群書類從第二十三輯武家部二』所収、九六頁。

(8) 日夏繁高著「本朝武藝小傳」(享保元年刊)『新編武術叢書全』所収、二二頁—二四頁参照。人物往来社、昭四三。

(9) 同右参照、また、「三議一統大雙紙」(『統群書類從第二十四輯上武家部』所収)を書きあらわし、武家礼法の祖といわれる。

(10) 『統群書類從第六輯系図部』(一七六頁)によれば、河村三郎義秀は、河村三郎秀高(本名遠實)の次男、本名義高。母は横山女。長七尺二寸、四十二歳死。とある。身の丈七尺二寸ということは稀にみる偉丈夫ではなかったかと思う。扇の要を射たという那須の余一は、小兵で十二束の矢を用いた(『平家物語』『日本古典文学大系』岩波書店所収、三一九頁)ことから考えれば、十三束の矢は普通より大きいにしても、義秀にすれば手ごろであつたのではないかと思う。

(11) 「就弓馬儀大概聞書」『群書類從第二十三輯武家部上』所収、一七四頁。

(12) 「弓馬問答」『統群書類從第二十三輯下』所収、四〇一頁。

(13) 「法量物」『群書類從第二十三輯武家部二』所収、五四頁。

(14) 『吾妻鏡』における次の各記録参照のこと。文治三年八月十五日。文治四年二月二十八日。文治四年八月十五日。文治六年四月三日。建久四年三月二十一日。建久四年九月十一日。建久五年十月九日。建仁三年一月三日。建仁四年一月十日。建仁四年二月十二日。嘉禎三年七月十九日。以上十一回出現するが、何れも御家人の中のすぐれた射手としてゐる。内容は、流鏑馬射手として四回、御弓射手として二回、小笠懸、遠笠懸射手として一回、箭口祭の時に一回、狩獵の時一回、他二回となる。

(15) 「作物」を極めて高度な射芸とみるのは『吾妻鏡』ばかりではない。

例えば、延文元年(一三五六)十二月成立といわれる「諏方大明神絵詞」(『群書類從第三輯下神祇部』五〇五—五〇六頁)に「三々九、八的、手挾、こいたれなど云作り物は垂迹の神変なり」とし、また、十四世紀後(南北朝後期—室町初期)成立といわれる「庭訓往来」(石川松太郎校注『庭訓往来』東洋文庫所収、二三—二五頁、平凡社)には、「三々九手挾、八的

等の曲節」と述べている。曲節とは、「技芸の変幻自在を披露する会」との注があるが、何れも「作物」の特異な高度性を主張している。

### おわりに

以上「作物」の由来について、第一に、「作物」という用語の出現とその実施の時期等、第二に、「作物」の射芸としての意味を、二、三の角度から考察を試みた。

さて、「作物」の由来を調べていく過程で、この射芸の特質はどのようなところにあるのかを考えさせられた。その結論として次のように要約してみた。

一、かつて伊勢貞丈が指摘したように、「弓馬の藝」のための稽古法であったこと。例えば、資料8にみられるような段階を経て、稽古法としてある一定の形式が作られていったものと考えられる。

二、稽古法として考えるだけでは解釈しきれない、高度な面をもっていたということ。すなわち、この射芸によって「兵の道」「武者の習」が問われるという、厳しい性質をもっていたと考えられる。

三、儀式的な形式にとらわれなかった。儀式としての射芸には、その巧拙も問われるが、同時に、服装や射芸前後の作法等も問われた。「作物」にも一定の形式や作法があったと思われるが、儀式としてのそれではなかったと考えられる。

四、実戦性が強調された。これは、儀式的性を拒むということ、右の第二の項と重複することかも知れないが、「作物」実施から、実戦の場における射芸もかくの如きものではなかったかと考えさせられるのである。

今回の小論は、結果的に、右の一、二についてより多く述べたことになったが、三、四の点についても簡単に触れ、結びとしたい。



「作物」が儀式的でなかったということも、実戦性が強調されたということも、「作物」実施の方法が形式にとられず、その場において臨機応変に、例えば、的の形や的の数、的までの距離などを変えていくところもあると思う。しかも、この変化の方向が、より高度で困難な射芸をめざすところに「作物」らしさがある。かくして、射手の側からすれば、己れの奥秘を尽さざるを得ないという状況がつけられるのである。これを換言すれば、平時にけおる射芸としては、最も練武的であったということができよう。

儀式的でなかったということについては、例えば、鶴岡八幡宮の放生会の神事に、流鏑馬の奉納が定例となつたのに対し、「作物」に含まれる各射芸は一度も行われなかった。流鏑馬の定例化は、それだけ儀式性を高め、かつて各武士団が様々な形式で行っていた流鏑馬も、次第に複雑な形式に統一されていったことを意味する。もっとも、流鏑馬という射芸は、『吾妻鏡』寿永三年（一一八四）正月十七日の記録にもあるように、「立願」の意をあらわすような騎射として考えられる面もあったと思う。

笠懸は、「流鏑馬、犬追物に比べて練武的、実用的要素が濃い」<sup>(2)</sup>射芸であったとする説もあるが、百番笠懸、七夕笠懸等とともに、「神式の祭礼に行われる神事笠懸」<sup>(3)</sup>もあった。神事に行われる笠懸には、それなりの儀式性に富んだ形式が整えられていたものと考えられる。

これに対して「作物」は、神事等の儀式の場で、ある一定の形式のもとに実施されたという記録は、『吾妻鏡』にも他の史料にも見当たらない。それだけ「作物」は、実戦的騎射の術を試み、各々の力量の真価を充分に発揮することを目的とした射芸ではなかったかと思う。

それでは次に、実戦的騎射とは何か、ということが問題になろう。「まえがき」にも、「騎射の技術の優劣は、その頃の戦斗形式からいって、自己の生死にかゝわるだけでなく、直接戦斗の帰趨を決定する」という重大な要素をも

っていると述べた。そこで、その頃の戦斗形式と、「作物」のような騎射術との関連について考察するため、やゝ長文にわたるが、一つの例をあげておきたい。説話文ではあるが、実戦的騎射を推量するに足る例と思うからである。

今昔物語集 卷第二十五

源充平良文合戦語 第三<sup>(4)</sup>

今昔、東国ニ源充<sup>みつる</sup>、平良文<sup>よしま</sup>ト云二人ノ兵有<sup>つほ</sup>ケリ。(中略)良文ガ方ヨリ充ガ方ニ云ハスル様、「今日ノ合戦ハ、各軍ヲ以テ射組セバ、其興不待<sup>ふ</sup>ヲ。只君ト我レトガ各ノ手品ヲ知ラムト也。然レバ、方々ノ軍ヲ不令射組シテ、只二人走ラセ合テ手ノ限り射ト思フハ何ガ思<sup>おも</sup>フ」ト。

充此レヲ聞テ、「我レモ然思給<sup>おも</sup>フル事也。速ニ罷<sup>は</sup>リ出ズ」ト云セテ、充楯ヲ離テ只一騎出来テ、雁勝<sup>かりまた</sup>ヲ番テ立テリ。良文モ此ノ返事ヲ聞テ喜テ郎等ヲ止メテ云ク、「只我レ一人手ノ限り射組マムト為ル也。尊達<sup>みことたち</sup>只任セテ見ヨ。然テ我射落ナバ、其時ニ取テ可葬<sup>くわ</sup>キ也」ト云テ、楯ノ内ヨリ只一騎歩カシ出ス。

然テ雁勝ヲ番テ走ラセ合ヌ。互ニ先ヅ射サセツ。次ノ箭<sup>や</sup>ニ慥<sup>たしか</sup>ニ射取ラムト思テ、各ノ弓ヲ引テ箭ヲ放ツテ馳セ違フ。各走セ過ヌレバ、亦各馬ヲ取テ返ス。亦弓箭ヲ引テ箭ヲ不放シテ馳セ違フ。各走ラセ過ヌレバ亦馬ヲ取テ返ス。亦弓ヲ引テ押宛<sup>おしあ</sup>ツ。良文充ガ最中ニ箭ヲ押宛テ、射ルニ、充馬ヨリ落ル様ニシテ箭ニ違ヘバ、太刀ノ股寄<sup>ももよせ</sup>ニ当ヌ。充亦取テ返シテ良文ガ最中ニ押宛テ射ルニ、良文箭ニ違テ身ヲ□ル時ニ、腰宛<sup>こしあて</sup>ニ射立テツ。亦馬ヲ取テ返シテ亦箭ヲ番テ走ラセ合フ時ニ、良文充ニ云ク、「互ニ射ル所ノ箭皆□ル箭共ニ非ズ、悉ク最モ中ヲ射ル箭也。然レバ共ニ手品ハ皆見ヘス。弊<sup>つた</sup>キ事無シ。而ルニ、此レ昔ヨリノ伝ハリ敵ニモ非ズ。今ハ此テ止ナム。只挑計<sup>いどむばかり</sup>ノ事也。互ニ強<sup>あがち</sup>ニ殺サムト可思<sup>おも</sup>キニ非ズ」ト。充此レヲ聞テ云ク、「我モ然<sup>しか</sup>ナムト思フ。実ニ互ニ手品ハ見

ッ。止ナム、吉キ事也。然ハ引テ返ナム」ト云テ、各軍ヲ引テ去ヌ。(後略)

将門の乱後のこと、東国における源充と平良文は、何れ劣らぬ「兵」であつたが、互いに楯を構えて対峙し、まさに合戦に入ろうとした時、良文から充に呼びかけて、今日は余人をまじえず、両者の射による腕前(手品)で勝負を決しようということになった。射は云うまでもなく騎射で、両者、両陣の中央で秘術(手ノ限り)を尽しての勝負である。これは、両者距離をおいて向い合い、そこから馬を全力疾走させて、すれ違いざま、相手を雁股の矢で射落すという勝負法である。

「さて、二人が中央にすゝみ出た。たがいに、雁股の矢をつがえて馬を馳けさせた。そこですれ違いざま矢を放つのだが、相手に先に射させ、無防備になったところを射落そうとするので、弓を引き絞ったまゝ矢は放たず、そのまゝすれ違つてしまふ。すぐ馬を引返して、今度はすれ違いざま一の矢を放つたが、これは当らず、二の矢をつがえてまたすれ違ふ。再び馬首を返して向い合う。機が熟して先ず良文が充の真ん中をめがけて矢を放つと、充は馬から落ちる程身体を倒して矢はずしたので、太刀の股寄せに當つた。充はまた取つて返し、良文の真ん中にねらいをつけて射ると、良文はさつと身をかわしたので、矢は刀の腰充てに當つた。そこで、おたがいの腕は互角とわかつたので仲直りしようといふ、その後は争うこともなくつき合つたといふ」語りの一節である。<sup>(6)</sup>

この当時の一般的な戦斗形式は、楯を構えた陣からの歩射の射合いにはじまり、次いで、名だゝる数人の騎馬武者による騎射での勝負になると考えられるが、右の、充と良文の場合、各一騎による勝負で、むしろ、「作物」の実戦性を推量するに都合がよい例である。

この戦斗形式の特徴をあげれば、平時における騎射術の鍛練が、疾走している馬上から動かぬ的を射当てるのに対

して、戦斗での的は、疾走している騎馬武者ということになる。このような状況で勝利を得るには、先ず第一に、馬を全力疾走させ、しかも、馬上で自由な身体動作ができるという馬術に卓越していなければならない。馬に速度ななければ格好の的にされてしまうし、馬上で機敏で自由な動作ができなければ、相手の矢をかわすこともできないからである。第二に、右の例でははずしているが、一の矢で相手に的中できるという射術に秀れていなければならない。あるいは、一回の疾走で（円を廻る形で疾走する時でも）二の矢、三の矢と、次々と矢をつがい、弓を引き絞り、ねらいを定めて射放てるようであればならない。しかも、甲冑で身を固めた武者の隙は小さいので、一層高度な射術が要求されるのである。

ところで、実戦での騎射と「作物」との関連はどうであろうか。「作物」に包括される各射芸の、細部にわたる実施方法についての検討は未だ不十分であるが、例えば、「八的」は、全力疾走する馬上から、往に四つの的、復にまた四つの的を次々と射当てるという射芸である。<sup>(6)</sup> 的は固定された物体ではあるが、次々と矢をつがえては四つの的を射当てるということ、馬を返して再び四つの的を射当てるという射芸は、『今昔物語集』の実戦の例と似ているところがあると思う。『今昔物語集』の例は、一回の疾走で一矢を放っているが、混戦となった場合はこの限りであるまい。そしてこの例は、史実そのものでないにしても、鎌倉時代前後における東国武士たちの、象徴的な戦斗形式であり武者ぶりをあらわしている<sup>(7)</sup>と云われているところから、「作物」の実戦性を強く感じさせられるのである。

流鏑馬や箒懸などの騎射も、もともとは実戦の場の経験から、馬場における鍛練の方法として創られたとも考えられるが、これらの騎射が次第に儀式性を高めていったのに対して、「作物」の各種目は、このような儀式的な形式を排除し、様々な実戦の場を想定して、それに相応した騎射としての形式を創りあげたところに特質があるのではないかと思われる。

# 注及び参考文献

- (1) かつて頼朝は、上総権介廣常に謀曲ありとしてこれに誅罪を加えた。その後寿永三年正月十七日、廣常の甲として鎌倉の頼朝にさし出されたが、その甲に一封の状が結びつけられていた。状の内容は願書であって、次のように記されていた。

敬白 上総国一宮宝前

立て申す所願の事

一、三箇年の中、神田二十町を寄進すべき事。

一、三箇年の中、式のごとく造営を致すべき事。

一、三箇年の中、萬度の流鏑馬を射るべき事。

右志は、前兵衛佐殿下の心中祈願成就、東国泰平のためなり。かくのごとき願望、一々に円満せしめば、いよいよ神の威光を崇めたてまつるものなり。よって立願右のごとし。

治承六年七月日

上総権介平朝臣廣常

- (2) 今村嘉雄『日本体育史』八八頁、不昧堂、昭四五。

- (3) 同右、八九頁。

- (4) 「源充平良文合戦語第三」『今昔物語集(3)』日本古典文学全集校注、訳、馬淵和夫他、四四二―四四六頁、小学館、昭四九。

- (5) 右の訳文と、『図説日本の歴史(5)貴族と武士』(編集責任者弥永貞三、集英社、昭四五)二三五頁の意識文からまとめた。

- (6) 『三的射法、四六三射法、八的之事』(原著者不詳・筆記写本)(八戸市立図書館古文書館蔵)参照。

- (7) 注(4)におけるこの説話の「傳承史的解説」の項参照、四四二―四四三頁。